



国際交流再起動



鈴木 基史

工学研究科国際交流委員会副委員長
マイクロエンジニアリング専攻 教授

2022年度4月から工学研究科国際交流委員会副委員長として委員会の取りまとめをさせていただくことになりました。Newsletterへの寄稿ではありますが、副委員長の冒頭のご挨拶は、その時々々の課題や展望のアーカイブという側面もありますので、2020年にはじまったCOVID-19の流行、いわゆるコロナ禍による国際交流活動の変化を振り返りつつ、今後の活動に向けて思うところを述べてみようと思います。

2020年1月に始まったCOVID-19の流行による社会活動の縮小は、大学の教育・研究活動に劇的な変化をもたらしました。とりわけ、留学生の受入れ・派遣や学術交流をはじめとする国際交流活動は最も大きな影響を受けることになりました。2020年度に来日を予定していた留学生の多くが予定した期日に来日できなくなり、入学試験にも大きな影響が出ました。京都大学から海外への学生の派遣も実質的に休止状態になりました。研究活動においても然りです。一方で、Zoomをはじめとするオンラインツールの急速な普及により、海外の研究者と気軽にディスカッションしたり、京都に居ながらにして国際会議に参加したりできるようになりました。当初は「なんと便利な世の中になったか」と感動すら覚えましたが、次第にオンラインでの交流の課題も明らかになってきました。2022年9月末の現時点でコロナ禍が必ずしも終息しているとは言い難い状況のもとで京都大学の国際交流活動が再起動しつつありますが、欧米をはじめとする諸外国の対応と比べると出遅れている感は否めません。国際交流活動の速やかな再起動と更なる発展に期待したいと思います。

留学生の受け入れは2020年度に若干の混乱があったかと思いますが、2021年度には厳しい水際対策をクリアして渡日してくる学生の数も増えました。今年度、国際交流委員会の副委員長として面接した留学生の多くが、母国の指導教員が京都大学の教員と旧知の中で、進学先として進められた。

・**教授が自分の志望する研究分野の第1人者であり、その研究室で研究したくて京都大学への進学を決断した。

などを、京都大学への進学を決めた理由としてあげます。個々の研究者が築いてきた研究者同士の絆や、確立された国際的なプレゼンスが、優秀な留学生を獲得して再び世界に送り出し、国際的なネットワークを広げていく上で重要であることを再認識するとともに、コロナ禍による数年の混乱ではびくともしないことがわかりました。

一方、本学学生の派遣については、留学生の受け入れよりも大幅に遅れて本年度から再開されつつあります。全学の国際学生交流委員会では、大学間学生交流協定に基づく交換留学生や短期派遣プログラムの準備が進められています。また、Kingfisher Global Leadership Programについては今年の夏休みに既にも実施され、工学部の学生も1名参加しました。工学研究科においても馬詰研究奨励賞の受賞者の海外研修もまもなく始まると推察します。こういった派遣事業に対して意欲的な学生が大勢応募しており、大変喜ばしく感じています。しかしながら、コロナ禍前の状況に比べれば、学生の海外派遣はまだ十分とはいえません。特に、海外で開催される国際会議等への学生の派遣については、これまで教員の帯同が必須とされてきたため、海外の一流の研究者の中で一人で頑張る経験を積むことはできませんでした。日本の水際対策もほぼ撤廃されましたので、学生単身での海外派遣が活発になることを期待します。

現在、国際交流活動の中で私が最も懸念しているのは、協定に基づく学術交流や学生交流です。私が国際交流委員会に就任してから更新を検討した部局間学術交流協定や部局間学生交流協定では、コロナ禍のために交流に苦戦していることが明らかにされました。残念ながら協定を廃止せざるを得なくなったものもあります。たまたまこの半年間に更新の時期を迎えた協定以外のほぼ全ての協定でも同様の状況ではないかと心配しています。先に述べたように、研究者同士の絆は数年のコロナ禍で切れることはありませんが、2代目3代目のコーディネーターの先生が引き継いでいる歴史ある協定では、今こそ意識的に交流を再開する努力が必要ではないでしょうか？ 視点を変えれば、コロナ禍によって交流協定がふるいにかければ、真に重要な協定がどれかを見極めるチャンスなのかもしれません。中堅から若手の研究者の皆さんには、この機会を利用して自分たちの新しい国際交流の輪の構築を目指してほしいと思います。

コウハクル ワサナ (Wasana KOWHAKUL)

附属工学基盤教育研究センター

講師

コウハクル ワサナと申します。タイのバンコクで生まれ育ちました。2022年6月1日に、京都大学大学院工学研究科附属工学基盤教育研究センター (ERセンター)に着任しました。私のミッションは、ニューノーマルの時代における新しい国際学術関係を再構築し、世界的な社会課題の解決や新しい学問の中心となるような活動をERセンターにおいて推進し、達成することです。また、京都大学の学生の皆さんが将来グローバルに活躍できる人材になれるよう育成することも目標の一つです。私の主な担当講義は、実践的科学英語演習I及びIIです。今回は実践的科学英語演習Iの教育事例について、ご紹介したいと思います。

この授業では、PBL(Project Base Learning)形式で科学論文の書き方を学べます。授業は三つのセッションに分かれています。セッション1は基本的な科学論文の書き方と練習(個人演習)、セッション2はKYT(危険予知訓練)グループディスカッション、セッション3はグループプロジェクトです。今回は、セッション2のKYTグループディスカッションについて紹介します。

今回のKYTでは、職場や研究室または労働状況が描かれた絵を使用し、労働災害や事故に繋がる可能性のある安全ではない状態や危険な行動などの要因について、少人数のグループに分かれて議論を行いました。その要因から起こりうる現象(事故の種類)について話し合い、考え、理解を深めます。さらに、グループ内でその現象に対して実行可能な対策を検討し、グループにおける行動目標を立てます。

KYTグループディスカッションではKYT Basic 4-Round Method (Zero accident promotion department)を基に、以下の内容を含む短時間のミーティングを実施しました。(写真1 参照)

- Round 1: どのような危険が潜んでいるか? (提示した状況を理解し、潜在的な危険を想像する)
- Round 2: 危険のポイントは何か? (発見した危険の内、「重要な危険」を絞り込む)
- Round 3: あなたならどうする? (具体的で実行可能な対策を考える)
- Round 4: 私たちはこうする (重要実施項目を絞り込み、チーム行動目標を設定する)

では、なぜ「実践的科学英語演習I」という講義名にも関わらず、私がKYTグループディスカッションをしたのでしょうか? 理由は2つの経験にあります。

1つ目は、私が東京大学の大学院生だったころ、米国Texas A&M大学Mary Kay O' Connor Process Safety Center (MKOPSC)に留学したのですが、当時Prof. Sam Mannannセンター長が私をセンターのプロジェクトに参加させて下さったことです。MKOPSCには、米国をはじめ、世界中から依頼があり(写真2参照)、沢山のプロジェクトがあります。私が一部担当となったプロジェクトは、毒性ガス処理作業前のヒューマンエラー評価でした。当時のグループメンバーは、アメリカ人のセンタースタッフと、中国、インドネシア、インドからの留学生でしたが、このプロジェクトのおかげで、一人きりだった私が、一ヶ月も経たないうちに現地の友達を作ることができました。テキサスは、電車・バスが不便な地域でしたが、現地の友達のリポートのおかげで、大きな問題もなく、一年間のセンターでの留学生活はあっという間に過ぎました。

2つ目は、KYTを知るきっかけとなった、住友化学株式会社生産技術センターに勤めたことです。KYT法を学んだことで、現場の危険に関する情報を共有し、問題解決能力を向上できただけでなく、現場のベテラン、オペレーター、事務方まで非常に幅広い職種の方々とコミュニケーションが取れました。

この2つの経験を活かし、この夏、ERセンターが受け入れた短期交流プログラムで来日したフロリダ大学生14名と実践的科学英語演習Iの受講生16名に、合同でKYTに取り組んでもらうことにしました。KYTを通じて両大学の受講生がお互いに仲良くなることを期待していました。「防災」をテーマに安全意識を高め、国籍の異なるグループで5つのチームを組み、チーム内で議論を重ねることで、各人がKYTに関するレポートを作成することができました。その後も、グループワークを通して、言葉の壁を乗り越

え、文化や考え方の違いを発見することで、レポートはさらにブラッシュアップされていきました。

実際に両大学の受講生に授業について感想を書いてもらいましたので、一部の例を以下に掲載いたします。

京都大学 博士後期課程1年生の感想:

The encounter with the friends from University of Florida is brilliant. In this difficult situation, we can hardly travel abroad and communicate with their local people. Communicating with people those who look things from a different point of view gives me a chance to freshen my thinking and refresh my mind. We enjoyed discussing our tasks and we can obtain unexpected idea. In addition, we take pleasure in telling each other our personalities at lunch time after classes. I have a plan to help the friends with sightseeing around Kyoto city. I would like to support their lives in Japan in return for their assisting our projects. I wish, they will be back safety to their country and they will want to come Japan again and again. Finally, I appreciate this meeting. Thank you so much.

フロリダ大学 学部3年生の感想:

Because I don't know much Japanese, this has been the best opportunity I will have to communicate with native Japanese people and other international students who study here. My favorite part was taking to Kyoto University students, as we could talk about our cultures in a less formal manner. I am extremely grateful for this opportunity, and I will carry this experience with me for the rest of my life. Thank you staff for your kindness and thought towards us Americans! ありがとうございます!

講義の目的であった火災に関する論文作成プロジェクトで、予定通り論文を完成させることができました。さらに、KYTによるチーム活動を通じて、期待通り両大学の受講生が仲良くなることができました。

最後になりますが、このようにERセンターでは、「工学」だけではなく「基盤教育」も大切に取り組んでいます。ERセンターでの活動をより分かりやすく皆様に知っていただくためにSNSも始めましたので、是非覗いてみて下さい。



写真1 実践的科学英語演習I中のKYT様子



写真2 (左から)Texas A&M大学 化学工学専攻長、MKOPSCセンター長 Prof. Sam Mannan、筆者(写真は2015年です。)

コロナ禍でのパリ留学と学び



吉野 和泰

社会基盤工学専攻 博士後期課程2年

2021年9月から1年間、国立パリ建築大学ラ・ヴィレット校へ交換留学しました。またトビテ!留学JAPANの実践活動として、パリ都市計画アトリエにて公共空間の再編事業の計画とデザイン、合意形成に関して研究を進めました。留学期間を通じて、研究対象としている欧州の先進的な道路空間再編プロジェクトに数多く足を延ばし、自分の目で見て、肌で雰囲気を感じることができました。より大きな文脈の中に自分の研究を位置づけるという意味でも、いち人間としての視野を広げるという意味でも、貴重な経験となりました。

コロナ禍での留学に際し最も懸念したのは、ロックダウンが再び実施され、最悪の場合留学期間途中で帰国しなければならない可能性がある、という不確定要素の多さでした。特にフランスではロックダウンなど大きな施策の情報が直前まで知らされないことが多く、慣れないフランス語圏において素早い情報収集と的確な判断ができるか不安でした。過年度に同校へ留学した先輩や他大学の留学希望者とも連絡を取り合いつつ、あらゆる可能性を想定しながら準備を進めました。

一方で、コロナ禍を契機とした(またはコロナ禍により加速された)各種施策をダイナミックな都市再編戦略のプロセスの一環として捉えたと、いち早く状況に対応しているヨーロッパ諸国において、その変化のあり様を直に体験することは大きな意味があるのではないかと考え、この時期に留学をする必要性をより強く感じていました。トビテ!が再開されたこと、また日本学術振興会特別研究員研究奨励金との併給が可能になったことが金銭的にも後押しとなり、留学を決断しました。

パリに着いた初日の衝撃は忘れられません。下の写真はパリ市の中心部を東西に通るリヴォリ通り(Rue de Rivoli)という幹線道路ですが、車線の2/3を自転車道に割り当てており、残りの1車線もバス・許可車両の専用レーンになっている(すなわち幹線道路から通過交通を完全に排除することに成功している)ことが分かります。飲食店の時短営業やマスク着用の義務化といった対症療法ではなく、このような大胆な都市・交通施策によってコロナに対応し、都市全体でソフトモビリティにシフトしていく。その様を目の当たりにして、いかに都市の将来像を思い描き、市民ひとりひとりが主体的に選択し、社会実験と検証によってエビデンスを積み上げていくことが重要であるかを痛感しました。

これから留学される方にも、それぞれの研究分野と視点において、日本では得難い“衝撃”体験があることを願っています。最後に、コロナ禍での困難な留学に際し、教務課留学生掛をはじめ支援して下さったすべての方に感謝申し上げます。



歩行者で賑わうリヴォリ通りの様子(2021年9月)

カルチャー・ギャップの間を歩く



Ma Yunting

高分子化学専攻 修士課程1年

2017年10月、私は中国から関西国際空港へ向かう飛行機に乗り、日本での留学生活を始めました。翌年の春、私は京都大学工学部に入学し、卒業した後は大学院工学研究科に進学しました。現在、私の京都生活は5年目となります。

実は、中学校のとき日本に旅行したことがあり、当時からすでに京都の風景や文化に惹かれ、京都に留学したいと思っていました。なので、最初に日本へ留学しに来た時は何もかもが斬新で、非常にワクワクする毎日を過ごしました。大学の授業以外にもサークルに入ったり、文化祭に参加したり、多彩な大学生活を体験しました。また、京都大学は留学生向けの活動が充実しているので、留学生の研修旅行や茶道体験、華道体験など様々な活動に参加できました。大学以外でも京都の歴史古蹟を観光することや神社の初詣、お祭りの手伝いなどを通して、日本人だけではなく各国から来た留学生とも言葉を交わす機会がありました。

しかし、言葉の壁や母国の文化、習慣の違いなど、たまに自分の行動に自信を持ってなくなり、カルチャーショックを受けることもありました。そんな時はいつも同じ留学生の立場の友達と交流し支え合いました。特に研究室に入った後は、日本人学生との交流もより深くなり、困ったときは彼らからいろいろ助けてもらいました。そして、私は日本文化についてもより詳しく理解できるようになりました。

学業も忙しいですが、残りの学生時代をより有意義に送りたいので、休みを利用して国際プログラムやボランティア活動などにも参加しています。いろいろな経験を活かして、今年には京都府から名誉友好大使として任命されました。京都府名誉友好大使は世界各地と京都府の「架け橋」として、異文化の交流を通じて京都府の国際化を推進することを役割にしています。任命されてから、小中学校で自国の文化について紹介し、中国の伝統文化「紅樓夢」の講演会などの活動をしました。これからも留学情報の発信や翻訳事業、料理教室などの活動に参加する予定です。

カルチャー・ギャップの間を歩きながら、私は知らず知らずのうちに異文化を受動的に受ける側から、異文化と積極的に交流し自発的に発信する側になりました。京都大学で過ごした時間は私の今までの人生の中で一番成長した時期であり、それゆえ自分に自信を持てるようになりました。今も日本に、京都に留学しに来てよかったと思っています。



「紅樓夢」の講演会の様子

新入外国人留学生研修2022 桂キャンパスツアーとウェルカム歓迎会(2022.4.28)

2019年度までは、工学基盤教育研究センターが主体となり、工学部・工学研究科の新入留学生に対して京都近郊への日帰り研修旅行を実施していましたが、コロナ禍による2020年度、2021年度の中止を経て、2022年度は留学生が孤立しないためのネットワークづくり、大学の施設やサービスの利用案内等、大学での生活に直結するレクリエーションに内容を一新して実施しました。

4月28日午前中に開催した吉田キャンパスツアーでは、晴天のもと5名の留学生が留学生ラウンジさずな、吉田第二保健室を訪れ、留学生向けの

交流イベントやメンタルケアについて日本語及び英語で説明を受けました。

午後からの桂キャンパスツアーには10名が参加し、各クラスターの主な施設を見学した後、桂図書館と桂保健室の利用について各担当者より説明を受けました。桂図書館に隣接する桂新広場では、建築学専攻の大学院学生から、広場のコンセプトや設計意図について説明がありました。

最後に、桂ラウンジで桂キャンパスを一望しながらのウェルカム歓迎会では、ツアーを手伝った日本人学生が京都にちなんだクイズを行い、教員、日本人学生を含めた参加者の交流が深まりました。



吉田キャンパスツアー



ウェルカム歓迎会



桂キャンパスBクラスターディスプレイ前で記念撮影



桂図書館の見学

国際交流日誌 (2021年10月1日～2022年9月30日)

10月1日(金)～12月18日(土)

グローバル環境人材養成プログラム実施

12月18日(土)

2021年京都大学-清華大学日中環境技術共同研究・教育シンポジウム及びセンター設置覚書調印式

The Committee for International Academic Exchange, Graduate School of Engineering, Kyoto University, Kyoto 615-8530, Japan
Phone 075-383-2050 / FAX 075-383-2038

615-8530 京都市西京区京都大学桂 京都大学工学研究科国際交流委員会